



三位一体の主日 (ヨハネ 16:12-15)

私たちのうちに三位一体の神が働き続けておられる

今日、三位一体の主日ですが、三つのことばを一つに結び付ける作業から始めましょう。イエスが山に登って、そのお姿が変わったとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」(マタイ 17・5) という声が雲の中から聞こえました。このとき一緒にいた弟子たちに求められたことは「イエスに聞く」ということでした。

次にイエスが何かを諭すとき、「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない」(ヨハネ 16・12) と仰います。他の箇所では、「パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである。」(マルコ 6・52) とありますが、ここで弟子たちが求められていることは「イエスがどなたであるかを理解する」ということでした。

もう一つ、復活したイエスは弟子たちに使命を授けます。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」(マルコ 16・15) 神が人間に求めておられる三つのこと、「イエスに聞くこと」「イエスを理解しようとする」「イエスに背中を押されて宣教に出かけること」これは別々の方からの招きではなく、同じ神からの招きです。ここから、三位一体の神に少し近づけるのではないかと考えました。

御父はその働きを御子に委ねたので、「これに聞け」と呼びかけます。御子は御父の全幅の信頼を得て「聞いて悟りなさい」(マタイ 15・10) と、聞いて受け入れる、聞いて信じるよう招きます。そして天に昇ったイエスは聖霊を送ってから、彼らが聞いて、理解し、信じたことを行動に移させるのです。三位一体の神は、ただ眺めて信心するだけの神ではなく、私たちが聞いて理解し、行動するように促す神なのです。

すると、私たちが聞いて、信じ、信じたことを行動に移しているなら、三位一体の神は私たちの中で働いていることになります。しかしその一連の流れが、どこかで滞ってしまうと、あとに続く人たちは誕生しないでしょう。つまり、神の言葉を聞き、これを信じて受け入れますが、信じたことが宣教に結び付かなければ、信じるだけの宗教に終わってしまいます。

信じるだけの宗教であれば、日本はありとあらゆる宗教のデパートであり、キリスト教さえも、信じるだけの宗教に終わるなら星の数ほどある宗教の一つで終わってしまうのです。イエスキリストを通して、御父は愛と赦しを人々に伝え、イエスは御父の思いを十字架の上まで実行し続けました。今私たちは、そのイエスが送ってくださった聖霊に勇気づけられて、信じたことの証しである愛と赦しを、出会う人に分かち合っていくのです。聞いて、信じ、信じたことを実行する。三位一体の神をたたえる私たちが、次の世代の人々を繋ぐために託された使命です。

キリストの聖体(ルカ 9:11b-17)